



# 「もうせん」「だんつう」「じゅうたん」の呼称考

カーペットはすばらしい 2024年(令和6年)4月

技術顧問 窪田 衛

## 【はじめに】

● 「じゅうたん」と「カーペット」はどう違うのか？  
 という質問がよくあるが、敷物の呼称について歴史を辿ると、「むしろ」「もうせん」「だんつう」「じゅうたん」「カーペット」さらには、「ラグ」「マット」など、いろいろな語句が出てくる。関西大学東西学術研究所発刊の『堺織通』(1992年)の序章で、「わが国のように敷物の歴史を欠いているような場合は、語句の区別が欠けていて、言葉のもつ意味を不明瞭にしている」との記述もあり、関連史料が少ないということで、一度紐解いて、語句の語源を考察してみた。

## 【古来の貢ぎ物・もうせん】

① 古来から、住まいには、獣毛皮類あるいは、藺草や藁、菅などの植物類を敷物として用いていたが、縄文、弥生そして古墳時代と進むうちに、獣皮や植物をそのままの状態で使用するのでなく、繊維や糸として編んだり、組んだり、織ったりする技法が生み出されてきた。これらの敷物は、いろいろな呼び方がされた。植物系では、「藺」「菰」「蓆」「筵」「褥」「茵」「ござ」などが挙げられる。



『魏志倭人伝』からの抜粋

### 【現代語訳】

- 「……今、  
 絳地交龍錦 (こうじこうりゅうきん) 五匹  
 (深紅色の地に「交龍」紋が刺繍された絹錦)
- 絳地縹縹 (こうじしやうしやうけい) 十張  
 (深紅色の地にあわ粒状の縮みのある毛氈)
- 縹縹 (せんこう) 五十五匹 (茜色の織物)
- 紺青 (こんじやう) 五十五匹 (群青色の織物)  
 を汝が献上した貢物に対して応えよう。  
 さらに特別に汝に贈ろう
- 紺地句文錦 (こんじくもんきん) 三匹  
 (紺色の地に湾曲模様が刺繍された絹錦)
- 細班華縹 (さいはんかけい) 五張  
 (細かく散りばめた花模様の毛氈)
- 白絹五十五匹 (無地の絹織物) ……」

### 【注】

- ・「匹 (ひき)」…古代中国では、1匹=2反分(4丈;約9m)。
- ・「張 (ちやう)」…「枚」数を表す。

### 【参考資料】

- ・『魏志倭人伝をそのまま読む』(himiko-y.com)

図1 魏王より卑弥呼への返礼品(一部)

② 獣毛皮の敷物としての記録は、『魏志倭人伝』のなかに初めて現れる。239年(景初3)卑弥呼が魏王・明帝に朝貢したことに對し、その返礼として、敷物類ほか多くの品々を持ち帰ったことが記されている(図1)。中国染織の歴史に詳しい原田淑人博士(故人)によれば、ここに記された「縹」は、毛製品で、その数え方が、一匹二匹という反物ではなく、十張五張(十枚五枚)、とあるのは、矩形の敷物を意味しているという。この「縹」とはどのような敷物であったのかは後述するが、この時代(3世紀)の中国に繊維敷物が存在した有力な史料となっている。

③ 紀元前5世紀頃、南ロシアのスキタイ民族の墳墓から、フェルト遺品が出土されている。漢民族は、このようなフェルトに「氈」という字を当てたのである。辞典『釈名』(巻第六・釈牀帳・第十八)(後漢末期)によると、「氈は、旃なり、毛相着き、旃々たるなり」とあり、毛が互いに擦り合っただけで密着する羊毛の縮絨性を利用して圧縮して作った毛製品に他ならない。また『日本書紀』のなかに、554年(欽明天皇15)百濟王聖明が、新羅を攻略するための援軍をわが国に請うたとき、錦二匹、氈氈一領(揃い)を献じたことが記されている。「氈氈」のほか「氈」「氈」などは、『説文解字』巻八上(後漢時代の字書)に、「皆、氈綵之属」との記録があり、即ち、6世紀には、「氈(かも、せん)」を献上品として受けていたことになる。

④ 日本は、奈良時代以前にペルシャと接点があったことは、意外に知られていない。7世紀、紛争でペルシャ人(当時は、ササン朝)が中国・長安に移住してきた際、ペルシャ文化を持ち込み、そして、日本は当時の遣唐使により、そ



## 毛氈

花氈第四号  
236 × 124cm

中央の童子は、手に、ポロ競技用のスティックを持っている。実は、ポロ競技の起源は、紀元前6世紀のペルシャと云われ、インド、中国、日本に伝来したが、英領植民地インドでイギリス兵が、この競技をみて本国に持ち帰って発展させた、と伝えられる。

図2 毛氈 / 正倉院宝物

の文化を持ち帰ったのである。正倉院や法隆寺には、いろいろな物品が証拠として残っている。正倉院には、8世紀頃の「花氈」や「色氈」が幾十枚も保管されている(図2)。文様がペルシャ起源であることや羊の種類が中央アジア産(2020年判明)のものもあったことから、中国製だけでなく、中央アジアやペルシャ由来の「氈」が入ってきたことがわかる。8世紀頃の日本、下野国で羊の飼育が行われ純国産の「氈」を製作した記録もあるが、当時、国内での羊飼育は極めて困難とされていたことから、国産の「氈」は、あったとしても多くはなく、殆ど大陸伝来品と考えられる。

⑤ ここで、前述の「罽」について考察すると、魏志倭人伝の「細班華罽」の意味から、その図柄が、細かく散りばめられ花模様であろう。一方、正倉院氈の柄は、例えば、「花氈」と呼ばれるものでは、無地物の上に花文様を描き、色毛綿を深く嵌めこんだ模様で、この二つは、同種同技法の柄といってもいいのではないだろうか。また、「令義解」(唐：834年頃)に「罽は氈の属で毛布」との記述もある。これらのことから、「罽」は「氈(毛氈)」と同一のものであったと考えられる。

### 【シルクロードで西へ東へ伝播】

⑥ 世界に目を向けると、もともと、敷物の起源は、紀元前数千年の頃からカスピ海南東地域で始まったとされ、その後、紀元前15世紀頃には、ペルシャなどの中東地域やオチベット地域で繊維敷物がつくられ、時代と共に東方へ拡大して、いわゆるシルクロードを経由して、中国本土に伝来したとされる。中国・楼蘭王国の遺跡からは、5～6世紀のものと思われる遺品が数多く出土している。そのなかには、織物やタペストリーも発見され、織物では、ペルシャ風を思わせるパイル織物(敷物)も見つかっている。そして、いつ頃中国にそのパイル織り技法が伝わり、製作されるようになったかははっきりしないが、一説には10世紀以降と考えられている。ただ最近になって、ピロード調のタペイル織物が紀元前の王墓から出土したとの報告もある。

⑦ 中国、白楽天の詩「紅線毯」(唐：801年)の中で、敷物について、次のように詩っている。「繭を択び、糸を繰りて…紅藍にて染む…織って毯となす…殿舗に可し…綵糸茸茸香払たり…温且つ柔なるに如かず…繡鞋歩に従って没す…」と。即ち、「繭を選んで糸を繰り、…紅藍染料で染め、織物にして毯(敷物)にする。御殿に敷くことができ…糸がフサフサとして香りが漂い…暖かくて柔らかい…靴で踏むと埋もれてしまうほど…」と、非常に珍重されていたようである。ここでは「毯」と表現している。「フサフサ…」という内容からみて、フェルトではなく、ピロード織などのパイル織の絹製敷物の可能性がある。はっきりはしないが、ペルシャ文化の流入があった時期でもあり、結びパイル織敷物の美しい文様と豪華さに魅せられたのかもしれない。

⑧ 13世紀後半になると、マルコポーロは「東方見聞録」のなかで、小アジア(当時は、セルジューク朝トルコ)でのパイル織り敷物を「世界でも無比に美しい敷物」と表現し、

また彼は、中国・元王朝の宮廷大広間の饗宴で、敷物上に座って食事する、と述べている。そして、『元史』(1370年成立)には、敷物を、初めて「地毯」と表した記録がみられる。これについては、9世紀頃の中国(唐)で、前述の「紅線毯」をはじめ、諸詩の記述で「地衣(ディーイ)」という語句あり、「地面を覆う敷物」を表していると考えられることから、その流れで派生した名称とも考えられる。この頃まだ、パイル織り敷物の技法の詳細について、明らかにされていないが、中国でのパイル織りの発展は、明王朝(1368～1644年)以降とされている。

⑨ 話は、日本に戻し、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』(747年(天平19))や『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』(同年)では、織物類を前者では「織氈」、後者では「織絨」(「絨」は「織」に同じ)と呼んでいて、いずれも氈類と区別している。やはり、その製法が異なっていたからであろう。即ちこの頃には、フェルト状の「氈」以外に、織物の敷物があったことになる。ここでいう「織氈」や「織絨」とはどんな織りの敷物なのか?中国製ということもあるのか?いずれにしても、まだこの時期では、つづれ織りなどのパイルのない織物の敷物と思われる。

⑩ 『倭名類聚鈔』巻十四(934年(承平4))には、「毯、毛席、以五色絲為之」「氈、毛席、撚毛為席也」という文があり、「氈」の文字だけでなく、五色の糸で織った毛織物として「毯」という文字がみられる。また、同じ頃、遣唐使廃止により、中国交易が途絶え、「毯」の入手も困難となって、「毯」の代用品として、絹織物を用いた「毯代(たんだい)」と呼ばれる敷物を、特に朝廷の儀式の際に椅子や腰掛けの下敷きに用いている。「江家次第」や「西宮記」(共に12世紀)の記録のなかにも、「綾毯代」など多く見られ、恐らく綾織りのパイルのない織物とみられる。このように、「氈」と「毯」は異なる組織の敷物であったことになる。

### 【南蛮貿易でパイル織】

⑪ 日本では、それ以降も、「氈」や「毯」に関する古文書はいくつか存在するが、安土桃山時代以降の南蛮貿易(16



16世紀末、ポルトガル領インド総督より秀吉公に献上されたタペストリー(サファビー朝ペルシャの宮廷工房で製作されたもの)。その一部を裁ち切り、陣羽織に仕立て直したとされる。金銀糸や黒の絹糸を用い、動物同士が戦う様子などペルシャの伝統的文様が描かれている。

図3 豊臣秀吉の陣羽織(ペルシャ絨毯・キリム)  
高台寺所蔵/画像提供 京都国立博物館

世紀中頃～17世紀初)によって、ポルトガルやスペイン等から調度品などが流入し、そのなかには、織物類、敷物類もみられた。豊臣秀吉(1537～98年)の陣羽織に使ったとされるペルシャ・キリム(つづれ織り)(図3)や祇園祭の山鉾の胴懸けに用いたとされる敷物(インドやペルシャ製パイル織り)は、この頃のものと思われる。この胴懸けは、今で云うペルシャ絨毯が多く、当時、日本語でどう呼んでいたのか、大きな関心事である。

また、ポルトガルからビロードと呼ばれる織物も流入している。これはポルトガル語の“veludo”の音訳からビロードという読みに変更した一方で、中国での呼称「天鷲絨」の文字が組み合わさり、両方の語句が現在に残ったとされる。南蛮貿易は、ポルトガル商人だけでなく、中国商人も含めた交易だったので、胴懸けもビロードのように、ポルトガル語からの派生か、中国語からの派生なのか、それともそれ以外なのか。これらは、パイルのある織物であり、これが恐らく日本で最初のパイル織り敷物であろう。その後、日本は鎖国時代を迎えるが、長崎・オランダ間の交易のみ許されていたことから、ビロードや胴懸け用敷物などの流入は続いたとみられる。

⑫ 中国では、清王朝になって、更に進化を遂げ、中国独自の製法・図柄でいわゆる「支那毯子」(俗名でいうと中国段通)が誕生した。北京や天津で織られるようになったのは、清王朝末期で、当時の宮廷への献上品として、扱われるようになったことで発展した。中国品の素材は羊毛で、織り方は、ペルシャ結び(左右非対称)、厚手の敷物であった。

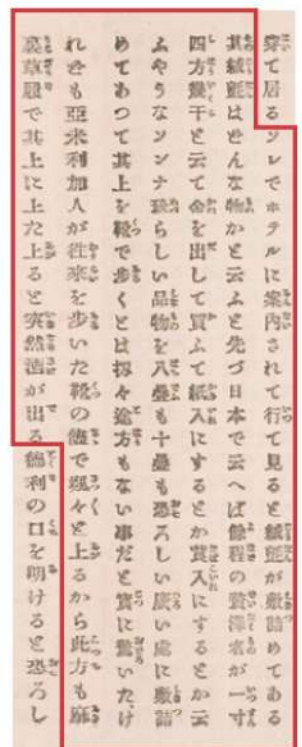
⑬ 日本でも、毛織物や敷物に関心が持たれ、よく取り上げられるようになった。中国の「支那毯子」及びその技法が、日本に伝来したのは、17世紀である。江戸元禄年間(1688～1704年)に九州佐賀扇町で、朝鮮経由(諸説あり)で外国人から技術を学び製作が始まった。これが「鍋島段通」と呼ばれるものであるが、羊毛は入手困難な時期であり、綿製の段通である。従来の「毛氈」とは違うパイル織り(ペルシャ結び)ではあるが、「毛氈」の一種であるとして、この頃はまだ、「花毛氈」や「扇町紋氈」と呼んでいた。そして、明治時代になって初めて、「毯子」由来で「だんつう」と呼ぶようになった。『箋注倭名類聚鈔』(江戸末期)にも、「清朝からの毛席に、陀牟都宇というものあり」と述べていて、恐らく、「毯子(tǎn·zi)」の音から当てた(音訳)のである。確かに日本人の耳には、「タァンツィ」と聞こえる。これに「段通」(のちに「段通」とも書く)という文字を当てた理由は定かではないが、ともあれ、1877年(明治10)の第一回内国勸業博覧会では、すでに「段通」と表現している。中国製のものの表現に「タンツウ毛氈」「唐大毛氈」という記録もあり、これらの表現を踏まえて、「段通」となったと考えられる。ただ、まだこの頃は、名称として「段通」が浸透しておらず、「毯子」「綿氈」「織毯」「織氈」「織絨緞」などまちまちであった。従来からの「氈」でなくても、「氈」「毛氈」の文字が多く使われていて、「中国渡来品(毯子)」「南蛮渡来品(ペルシャ製)」などが混在している状況では、あ

まり区別なく、「氈」や「毛氈」と呼んでいたようだ。例えば、ペルシャ製の敷物を「ペルシャ氈」、「トルコ氈」など。そして、1881年(明治14)の第二回同博覧会で、「絨氈類」という表現がみられる。ようやく、「絨氈」という呼び名が現れているが、ここでは、国産の敷物の総称として使われている。しかし、これ以降、貿易関連資料では、特に海外品で「絨氈」表現が多くみられる。

### 【舶来ものを「絨」】

⑭ 一説では、「じゅうたん」という呼称は、明治から大正期にかけての舶来の繊維製敷物につけられた名であると云われている(『言海』1889年(明治22))。当時、輸入された敷物といえば、欧米からのウィルトンやアキスミンスターなどの機械織りの長尺の敷物が主体で、このため、「じゅうたん」はこれらのものだけの呼び名だと解釈された。ということは、英語“carpet”(カーペット)という語句も入ってきていたはずで、その和訳として「じゅうたん(絨氈)」を当てたとも考えられる。

⑮ 江戸幕府の軍艦「咸臨丸」。この船で、米通商条約批准交換の使節団(1860年(万延1))に勝海舟を艦長として、福沢諭吉が随員し渡米した時のことである。サンフランシスコ(桑港)のホテルに入ると、驚きの連続であったらしく、その様子を各々『海軍歴史』(1889年(明治22))、『福翁自伝』(=図4)(1898年(明治31))で述べている。部屋中超高級な美しい敷物が敷きつめられ、しかも靴で歩いていたようである。アメリカで使用されていた敷物が「毛氈」タイプなのか「織物」タイプなのか何かは不明ではあるが、



#### 【現代語訳】

(サンフランシスコ(桑港)ホテルにて)  
「・・・それでホテルに案内されて行って見ると、絨氈(じゅうたん)が敷詰めである。その絨氈はどんな物かと云うと、まず日本で云えば余程の贅沢者が一寸(いっすん)四方幾干(いくら)と云って金を出して買つて、紙入(かみい)れにするとか、食入(たばこい)れにするとか云うようなそんな珍しい品物を、八畳も十畳も恐ろしい広い処に敷詰めであつて、その上を靴で歩くと、扱々(さてさて)途方もない事だと実に驚いた。けれども亜米利加(アメリカ)人が往來を歩いた靴の儘(まま)で廻々(さっさつ)と上(あ)がるから此方(こ)ちも麻裏草履(あしむす)でその上に乗った。上がると、いきなり酒がでる・・・」

(画像提供：慶応義塾福澤研究センター)

それを各々「厚毛花氈」、「絨氈<sup>じゅうたん</sup>」と記している。その敷物についての感想として、「美麗」や「贅沢」「珍しい」という表現であることから、恐らく、美しい図柄の織物で、当時のアメリカなら、機械織りのパイル敷物であったに違いない。この時点で、はっきり「絨氈」の語句が現れ、読みは「じゅうたん」。また、岩倉使節団（1871～73年（明治4～6））の米欧視察記録では、織物工場見学の際、「絨毯」と表現している。

さらに、1880年（明治13）、ペルシャ（波斯）商況調査団が派遣されていて、その報告書『波斯紀行』で、以下の記述がある。「……此國ノ氈氈ハ尤モ著名ニシテ其染色久シキニ耐工其組織緻密ニシテ頗ル雅致アリ歐洲人甚タ之ヲ愛ス是レエズド、ケルマン及クルジスタン地方ニ於テ製造スル者ナリ此外駱駝ノ毛ヲ糊シタル厚褥席アリ人家必ス此物及氈氈ヲ併セ敷ク……」と、ペルシャ製敷物についても、「氈（＝絨）氈」と表現している。1887年（明治20）ごろからの「通商広報」などにも、「絨氈」の表現があるが、「地氈」や「カーペット」の表現も見受けられる。このころは、「段通」もふくめて「地氈」や「絨氈」と呼ぶこともあったようだ。また、この頃の貿易資料などをみても、「地氈」「絨氈」「地氈」など、あまり区別なく使われている傾向があったと思われる。尚、現在の貿易統計の品目名としては、「じゅうたん」その他の床敷物であり、ひらがなの「じゅうたん」を基本的に用いている。

⑩ 1876年（明治9）発行の『東京新繁昌記』には、「…<sup>マシ</sup>庭席<sup>シウダン</sup>ヘテ氈氈ヲ敷キ…」、「氈氈」を普通の読み方をすると、「くゆ」であるが、敢えて「ジウダン」というフリガナを付けてあるのが興味深い。そう考えると、とにかく古来より、敷物については、「毛氈」「氈」「毯」「氈氈」「氈」「氈」「氈氈」など、色々な漢字が当てられ、各々、それなりの意味があったのであろうが、方言もあるとのことなので（前述「説文解字」）、相互の違いはあまり気にする必要はなさそうである。

さて、「じゅうたん」呼称の由来については、明治初期の舶来の敷物に名付けられた呼び名であるということから、恐らく、ピロードなど厚手のパイル織物としての「絨」と、古来から敷物を示す「氈」や「毯」の文字とを組み合わせて、「絨氈」或いは「絨毯」としたのであろう。「絨」という語句は、平安・鎌倉時代から使い始められたと考えられ、『普及版 字通』（2014年）には、もとは「ほそぬの」と云って目の細かな布の意であったが、「毛が深い状態」を「蒙戎（も

うじゅう）」といったことから、それが、「じゅうたん」に転用されたと考えられる、との解説がある。また、南蛮貿易時代、フサフサとしたピロード（前述）を単に「絨」と呼んだという記録（『人文学報』京都大学）もあり、そこからの引用とみられる。中国語の「地毯」から派生したとの説もあるが、それは音韻由来というよりむしろ、「絨」と「地氈（地毯）」が組み合わせ、その後「絨氈（絨毯）」となったという考え方とするのが自然であろう。

⑪ 現在、日本では、通常、「絨通」も含めて床敷物の総称として、「じゅうたん」または「カーペット」という語句を用いる。もともと、欧米からのウィルトンなどの機械織りを「じゅうたん」または「カーペット」と呼んでいたが、昭和の中頃、アメリカからタフト方式の機械が導入され、「タフトカーペット」と呼んだことから、従来の機械織りの敷物を、それと区別するために、「織じゅうたん」と敢えて呼ぶようになった。これがJIS規格の表記である。とはいえ、殆どどんな敷物でも「じゅうたん」や「カーペット」と呼んでも通用するのが実情である。因みに、英語圏では、基本は、すべて“carpet”であり、敷き方での分類で、部屋敷き詰めでなく、一部に置き敷きするものを特に“(area) rug”と呼んでいる。事実、明治期の和絨通の英訳は、“DANTSU RUGS”と呼んでいた。尚、中国では、現在、敷物のことを一般的に「地毯（dītǎn; ディータン）」と表現している。「地氈（地毡）（dìzhān; ディーチャン）」ともいう。手織りの「毯子」についても、「地毯」と呼ぶことが多い。「ペルシャ絨毯」も「波斯地毯」と呼んでいる。

## 【あとがき】

⑫ 敷物の歴史を辿ってみると、数千年も遡ることになったが、乗り物や電化製品のように、進化とともに、形や素材も変え、機能性も各段に向上したのものとは異なり、進化はしつつも基本的には繊維を集めて敷物の形態にしたに過ぎない。これは特に発展遅れというのではなく、「床に敷くもの」という消費財として、そういうものなのであろう。逆に言えば、古来から、それなりに合理的なモノづくりができていたともいえよう。敷物の呼称も、時代とともに、多くの呼び名が生まれては消滅していったということだが、さすがに今は「罽（けい）」は使わないが、「蓆」や「毛氈」など、古い呼び名でも現代に生きていて通用することに驚いた。そして、呼び名それぞれの語源についても興味深く奥深い物語が感じられる。

### 【参考文献】

- ①原田淑人「古代毛織物雑考 東と西－8－（聖心女子大学）」（1966）
- ②岡崎喜熊著「敷物の文化史」学生社（1981）
- ③佐伯隆敏著「絨毯 それは砂漠にはじまる」芸術生活社（1982）
- ④角山幸洋著「堺絨通－中国絨通技術の受容と輸出地場産業の成立－」関西大学出版部（1992）
- ⑤マルコポーロ、愛宕松男訳注「完訳 東方見聞録1」平凡社（2000）
- ⑥坂本勉著「ヒストリア017 ペルシャ絨毯の道」山川出版社（2003）
- ⑦堺市博物館「特別展 堺絨通ものがたり－日本の絨通、世界を結ぶ－」（2017）
- ⑧株式会社絨毯ギャラリー「絨毯で迎えるシルクロード」（2018）
- ⑨砂崎素子著「長崎毛氈モノ語り」長崎文献社（2022）
- ⑩ペルシャ絨毯専門店・フルーリア東京 HP（2023.10.7）

発行所

日本カーペット工業組合

大阪市中央区本町橋2-5

〒540-0029（マイドームおおさか5F）

TEL. (06) 6809-2868

FAX. (06) 6809-2869

URL <http://www.carpet.or.jp>

E-mail [info@carpet.or.jp](mailto:info@carpet.or.jp)

毎月1回5日発行